



東京の多摩美術大学の教壇に週1度あてやかな和服姿の女性が立つ。

学生たちに伝授

するのは、華道でも日本舞踊でもない。不思議な、でも合理的な「民俗情報工学」の世界だ。

「古来、日本の先人たちが受け継いできた知識を『迷信』と切り捨てるのではなく、科学的に捉え直し

て現代に生かすのが狙

## 和服の民俗学者

学生たちは「今まで日本にいた

いです」。非常勤講師井戸理恵いどりえ子さん(47)はそう語る。

例えばカッパ。全国各地に伝説が残る。

「カッパが出るとされる場所の多くは川の急流や沼の深み。人を危険な場所に近づけないための生活の知恵ですね」

北見市で生まれ、国学院大で民俗学を専攻した。東京の大手企業勤務などを経て7年前から

多摩美術大に。授業の合間を縫って各地を歩き、古老からの聞き取り調査を重ねる。

和服を着るのは、それがやはり日本古来の知恵の結晶だからだ。和服の染料には葉草が多く使われる。身動きできない場所で病気になった修行僧が葉草の染みた服をちぎって食べた。また戦場で傷ついた兵士が葉草成分を含む服を止血に使った。

「この神社はなぜここにあるのか、この言い伝えがあるのはどうしてかと、『なぜ』を考えると自体が楽しい」

3年前から東京北見会の会長を務め、ふるさとの活性化にも力を注ぐ。(伊藤 一哉)